

第29図 日間賀島第6号墳美道部埋葬施設の出土品(1は第4様式の角形製塩土器)

にはじめて着目したのは、大府市惣作遺跡(注4)を調査した加藤岩蔵氏である。ついで杉崎・磯部・山下・宮川は美浜町奥田遺跡の調査において、第一型式灰釉陶器(注5)が伴出することを確認した。報告(注6)にあたり僅少であるが第二型式の灰釉陶器もみられることから終末を10世紀としたが、主体の第一型式灰釉陶器の年代である9世紀を下限としたい。製塩土器第4様式の年代は8～9世紀である。

そして今次の調査で新しく提示した第5様式については、伴出した灰釉陶器を調査員は猿投窯の折戸第53号窯式の11世紀後半に比定している。灰釉陶器の編年という第三型式である。中には灰釉陶器第二型式の資料もみられることから、知多式製塩土器の第5様式の年代は10～11世紀と考えたい。なお渥美式製塩土器の第1様式の時期については、芳賀陽氏により須恵器第一型式の資料の伴出が報告(注7)され、5世紀後葉に上限がも定められている。昭和41年の日本考古学協会製塩部会による青山貝塚の調査は、久永春男・斉藤嘉彦の両氏と杉崎が担当したのであるが、貝塚中央部の最下層で須恵器をとともなわない古式土師器のビットを検出した。報告のおりをえていないが上限はもう少しさかのぼるものと考えている。また渥美式の第2様式については単独遺構が知られていない。

3. 知多式・渥美式の古代製塩遺跡

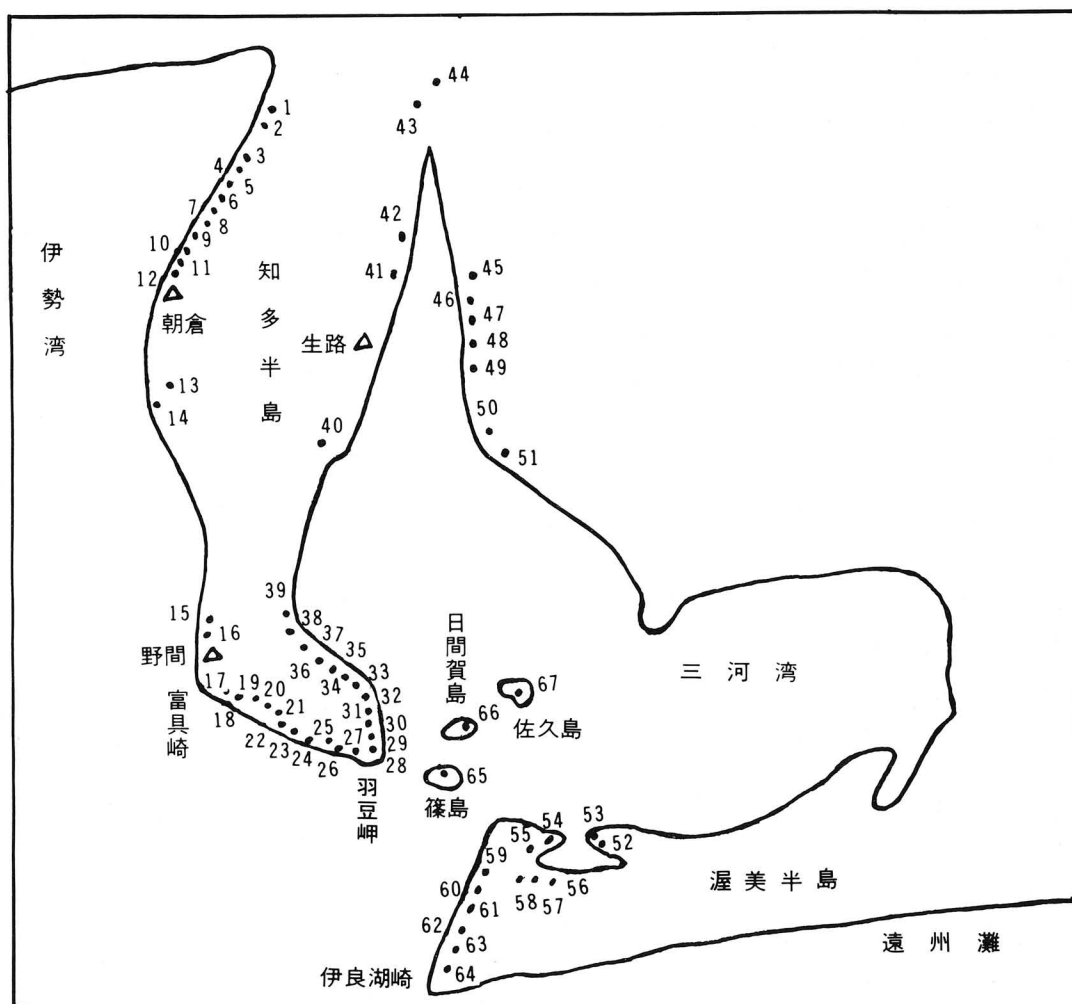
東海地方の古代製塩遺跡は、知多半島・渥美半島、そして三河湾沿岸の碧海地方、さらに湾内の島々から、別表に示したような67の遺跡が知られている。ほかに志摩半島においては、現地の伊藤保氏によって長年の成果が累積されていたのであるが、近年になり久永春男氏や近藤義郎氏の援助をうけて、製塩遺跡の発掘がおこなわれている。しかし伊勢湾の西岸とか遠江灘・駿河湾さらに伊豆半島の地域では、いまのところ遺跡が発見されていない。

遺跡の数については、昭和47年の報告(注8)の時より5遺跡を加えることができた。

1の東海市名和町一番畑については、発見者の池田陸介氏に教示をうけたものであり、武豊町の37・39については山下勝年氏が調査したものである。

また碧南市の玉津浦は稲垣晋也氏により、照光堂坂下遺跡は林口孝氏の教示により追加できたものである。一応ここに67遺跡をあげたが、遺跡の大きさにも大小があり、知多郡美浜町奥田の

石畑地点は長さ500mに達するものであり、59番から63番にあげた渥美半島先端の伊勢湾に面する西の浜一帯の遺跡は、かつて大森遺跡として総括され、延々4kmにもおよぶ大遺跡であったが、先般の県教育委員会で文化財目録をつくるにあたり、久江森（きゅうえのもり）・清水南松（しみずなんまつ）・七本木・大松上（伊良湖国民休暇村の敷地内）と5遺跡にわけて報告されたものである。また三河湾内の日間賀島などについては、個々の遺跡をあげずに島の名を標記したが、全島が第三紀中新統の水成岩からできている低い島であり、互層をなす頁岩や砂岩の崩壊作用が、海蝕により促進されて、周囲の海岸線からはほとんど遺構が発見されないのであるが、先年、愛知用水の水を島へ通すにあたり、水道管を埋める工事がなされたところ、全島の海岸線いたるところ、浦という浦から莫大な製塩土器が検出されてきた。私はかつて日間賀島第6号墳において、羨道部に追葬された埋葬施設から製塩土器を発見したことがあるが、古代の生産遺跡としては特殊な性格をもつ遺跡であって、それぞれの遺跡に年代や規模の差があり、遺跡の数のみでは正確な実体を評価することができない。



第30図 知多・渥美地方の製塩遺跡

第7表 知多・渥美地方の製塩遺跡地名表

№	遺 跡 所 在 地	№	遺 跡 所 在 地
1	東海市名和一番畑	35	美浜町矢梨
2	同 名和長光寺	36	同 河和北屋敷
3	同 大田松崎	37	武豊町富貴市場
4	同 大田下浜田	38	同 富貴浦島
5	同 高横須賀御亭	39	同 武豊下門
6	同 横須賀宮西	40	半田市成岩港本町
7	同 横須賀大門	41	東浦町森岡塩田
8	同 養父漁脇	42	同 森岡取手
9	同 養父浜脇	43	大府市横根惣作
10	同 養父釈迦御堂	44	刈谷市逢見半崎
11	知多市八幡荒井	45	高浜市北浦恩任寺
12	同 八幡西平井	46	同 研屋
13	同 金沢浜田	47	同 王江
14	常滑市西之口上ゲ	48	同 藪田
15	美浜町奥田石畑	49	同 高浜埠頭
16	同 奥田砂原	50	碧南市玉津浦
17	南知多町内海寺前	51	同 照光堂坂下
18	同 内海小榑(1)	52	渥美町伊川津青山
19	同 内海小榑(2)	53	同 伊川津貝之浜
20	同 山海欠が前	54	同 小中山一分
21	同 山海清水	55	同 小森植松
22	同 山海天神東	56	同 小森寺山
23	同 豊浜中州	57	同 小森東丸田
24	同 豊浜峠	58	同 中山清水
25	同 小佐草花	59	同 西の浜久江森
26	同 小佐火穴	60	同 西の浜大森
27	同 師崎汁谷	61	同 西の浜清水南松
28	同 師崎板取	62	同 西の浜七本木
29	同 師崎島東	63	同 西の浜大松上
30	同 長谷	64	同 古婦下
31	同 大井北側	65	南知多町篠島
32	同 大井間哉	66	同 日間賀島
33	同 大井小海田	67	一色町佐久島ヂグド浜
34	同 豊丘山田		

これらの遺跡の立地は、すべて現在の海岸線か、それに近い古代の海岸線と考えられる浜堤や砂堆の上であり、逆にそれぞれの時代の海岸線の位置を示す徴証ともなっている。

もう一つ、古代の東海地方とくに知多・渥美地方で、塩の生産が確実におこなわれたことを示す資料は、平城宮出土の木簡である。

1. 「尾張国智多郡番賀郷花井里丸マ龍麻呂」 「調塩三斗 神亀四年十月七日」
2. 「尾張国智多郡贅代郷朝倉里戸主和爾部色 夫智 調塩三斗 天平元年」
3. 「一一一富具郷野間里和爾部臣牟良御調塩」 「一一一平元年十月十九日郷長和爾部安倍」
4. 「尾張国智多郡富具郷野間一一一」 「塩三斗十月五日」
5. 「参河国渥美郡大壁郷海マ首麻呂調塩一斗」

これらはいずれも調として塩を都へ貢進していたことを物がたる資料である。

ほかにも平安時代初期の文献として、延喜式大膳があり、知多半島における塩生産の状況がうかがえる。注目されるのは調の品目として特記されている生道塩である。享保八年の板本等によると、生道塩は大甕ほどのかたまりをした堅塩であり、それをつき崩すと一斗ほどの塩になるという。普通の塩とは区別されているのだから特別のものであったろう。

おなじく平城宮の別の土壇からでた木簡であるが、前にあげた貢進物の付札とは体裁のちがう短冊形の木簡には「英比郷一塩一」という例があり、判読されていない「塩」の前の一字は春塩とか堅塩のような塩の種類を示す用字といわれている。（注9）生路が英比郷の中に属していることも考えあわせると、生路塩とも関連があらう。

これらの古代文献に知られる土地を具体的に調べてみると、野間里・朝倉里や生路については現在も地名がのこっているが、番賀郷花井里については確実な場所が不明である。和名抄における尾張国智多郡内の郷名記載順序からみて、番賀郷は贅代郷の北の地域とされ、朝倉までが贅代郷であることや塩生産の土地であることと考えあわせると、番賀郷花井里は知多市八幡から北につづく東海市の海岸線に沿った村里のどれかに推定される。大規模な製塩集落である松崎貝塚の土地も有力な候補の一つである。

4. 海浜集落の生活

松崎貝塚の砂堆に対して名鉄電車の線路が斜方向より切りこんできているため、第Ⅱ区中央トレンチの付近では、生活址と考えられる面につづいており、そこでは鉄製品が割合に良好な形でのこっていた。その一つが鉄製の釣針であるが、私はかつて昭和35年の夏に日間賀島において、日間賀第4号墳の調査（注10）した時に、松崎貝塚で検出したと酷似した例を発掘したことがある。もちろん昼間の作業であるが夜釣りの盛んな季節で幾人かの漁士が見学にきており、石室の床面に浮彫にされてくる釣針をみて「サメを釣る針だ。今の針とそっくりだ。」といった。なお聞きただしてみると、長縄漁の釣針でイイダコを餌にして釣るのだという。

その後昭和43年・44年と愛知県教育委員会の三河湾・伊勢湾漁撈習俗緊急調査に参加し、隣の篠島において興味ある話を聞いた。サメは非常に種類が多く、一般的にいうと臭味が強く、そのままでは食用に適さないのであるが、スザメ・ネズミザメといった種類は今日でもスハヤリに供されており、コロザメやヒタチザメはエイに似た肉で油が少なくて保存がきくとされ、ネズミザメの肉のごときは刺身にもできるといわれている。

昭和51年の松崎貝塚の調査を終った直後、日間賀島で第5号墳の調査にあたり再び同様な釣針を検出した。日間賀第4・第5墳号と松崎貝塚の3例である。

一方、伊勢湾・三河湾関係の平城宮木簡では前節にのべた調塩付札の他に、篠島・佐久島から貢上された贅付札が知られている。篠島が14点と佐久島が10点の多数であるが、代表的なものをあげてみよう。

1. 「参河国播豆郡篠島海部供奉五月料御贅佐米楚割六斤」
2. 「参河国播豆郡析島海部供奉六月料御贅佐米楚割六斤」
3. 「参河国播豆郡篠島海部供奉正月料御贅参簞々別六斤並赤魚」

貢納された魚の種類としては、佐米楚割がもっとも多く、赤魚・須々岐・宇波加がみられる。析島は佐久島であり、恐らくは日間賀も加えた周辺の島々が同一の形でおなじような貢進物を京進していた海部集団が居住していたものである。

昭和35年に日間賀第4号墳と並行して調査した第6号墳において、副葬品の中から製塩土器を検出したことを前にのべたが、日間賀第6号墳は玄室部床面に4基の組合せ式石棺を築き、羨道